

## 5.1 調教プログラム

調教プログラムはふたつの点から考えなければなりません。ひとつめは、精神面のトレーニングです。ふたつめは猛禽の肉体管理です。調教に反応する食欲があり、健康で強靱な体になるよう、調子を整えていくべきです。

捕獲した野生のタカと飼育下で繁殖された若いハヤブサの調教では異なる点があるので、画一的な調教方法はあてはまりません。個々の猛禽はそれぞれの反応に応じて調教されるべきです。腕の良いファルコナーは無意味な繰り返しで猛禽を駄目にするのではなく、また、薄氷の上を歩くような危険を冒したりもせず猛禽を仕上げるものです。

私が最も速く調教できた猛禽はサリーという名のハックしたニュージーランドファルコンでした。拳の上で初めて餌を食べ、ルアーに急降下するまで20分でした。素晴らしい出来です。一方で、ゴードンと言う名の野生の成鳥のクマタカは、どんなに努力してもフリーフライトさせることができませんでした。とても理解が遅い上に、猜疑心の強い個体だったからです。拳の上から逃げようと羽ばたくことはほとんどせず、固く心を閉ざしたまま私をにらみつけるだけでした。

このようにそれぞれの個体による違いはあるものの、ファルコナーは明確な調教プランを立てておかなければなりません。最初の鷹狩りの日が決められているとします。その日から逆算して、調教プログラムを組み立てなければなりません。具体的には、節目に合わせて目標を設定すべきです。私の仕事は毎年20から25羽のハヤブサをカラス狩り用に調教することです。どのハヤブサも個別に計画された調教課程をたどります。悪天候や個体差を考慮し、決められた日に狩りに用いる準備ができるようにします。私は猛禽の飲み込みの良さをうらやましく思うことがあります。若い未調教の猛禽を最初から正しく調教しきってしまうほうが易しいです。あっという間に調教完了です。一方で、調教のどこかが間違っしまい、フード嫌いのハヤブサになってしまった場合、全てのトレーニングはこの悪癖を強制するまで中止となり、残りの調教課程にはより多くの時間と努力が必要になるでしょう。

私の場合、カラス狩り用のハヤブサの調教計画は以下の通りです。

- 1-5 日目 ふ卵器でふ化させ、人間が餌を与える
- 5-10 日目 足輪が外れなくなるまでインプリントのハヤブサに育てさせる
- 10-40 日目 大きな小屋の中でつがいのハヤブサに育てさせる
- 40-45 日目 ハック用の箱の中で過ごさせる
- 45-60 日目 ハックする
- 60-80 日目 ハック済みのほかのハヤブサと一緒に大きな小屋の中に放す
- 80 日目 捕まえてフードを被せ、計量し、アंकレット、ジェス、テールマウントを装着する
- 81-85 日目 フードを被せる、または人目に触れない屋外につないでおきながら、じょじょに体重を下げる
- 85-99 日目 拳に据え、拳やルアーに呼ぶ。ジャンプアップで運動させる。フリーフライト
- 99-105 日目 ルアーパスとジャンプアップで運動させる
- 105-110 日目 500m以上離れたルアーに向かってストレートフライトさせる。引きずったカラスの死骸を追わせる
- 110 日目 カラス狩り開始。10羽目までは1日1羽を獲らせるのみにとどめる。激しいフライトの翌日は獲物を追わせない
- 120 日目 獲物を下から上へ旋回しながら追いつめる狩りを始める

読者のなかには私の調教プログラムはハヤブサが生後85日目を迎えたときから始まると思われる方もいるでしょう。しかし、卵がかえたその日から調教プログラムは始まっています。ハヤブサがたどるのは、注意深く設計された刷り込み、学習、体づくりと精神面の成熟課程です。餌と人間の関連付けは生後85日目ではじめて行われます。ハヤブサが調教の主要な段階のいくつかを終えているからです。

大事なことは、個々の猛禽に合わせたシンプルな調教プログラムを実行し、ポジティブに進行させることです。若い猛禽はとても影響を受けやすく、調教途中の猛禽の扱いに迷っていると、問題を引き起こします。本来の発達時期に

合わせて調教されなかった猛禽には、数多くの問題が付きまといまいます。叫び癖、アグレッション、キャリー、気分屋、最初の獲物をなかなかしとめられないことなどです。ファルコナーはこれらの問題すべてを予測し、避けることを学ばねばなりません。

私はブリーダーとして毎年たくさんの猛禽を新しいオーナーに送り出していますが、残念ながら、毎年何羽かはうまく仕上がりにません。ほとんどの場合、原因は猛禽にとって適切な環境を整えられないファルコナーです。かわりに責められるのは猛禽です。一方で、私たちの手元に残った猛禽はよく仕上がります。成長過程の問題を克服できるよう、格別の注意を払い、手助けするからです。

新しい猛禽をもうすぐ迎えるなら、二つの計画表を作ってください。ひとつめは、獲物を安定して獲れるようになるまでのスケジュールです。ふたつめは、あなたの猛禽が身に着けてほしい特性のリストです。現在をポイント A（初夏、猛禽は未調教で狩りをする体力がない）とすると、ポイント B（秋の初め、猛禽は調教され狩りをする体力がある）に到達する必要があります。ハリスホークを迎えるなら、以下のような目標が挙げられます。

- この上なく健康で羽根のコンディションは最高である
- フードを被ることを嫌がらない。頭の形にあったフードがある
- 拳の上では行儀よく、人間の手を掴もうとすることは決してない
- 餌なしでも 200m の距離を拳に向かってすぐ飛んでくる
- 一回のセッションで 150 回のジャンプアップができる体力がある
- 強風の丘陵地帯でフライトしたことがあり、ハリスホークにとって適した場所ではウエイト・オンする
- 猟犬と協力して狩りができる
- 止まり木から呼ぶことができる
- ファルコナーの姿を追って飛び、狩場を見渡せる枝に止まる
- ウサギをよく獲り、鳥も獲る
- 叫ばない
- ほかのハリスホークと協力して狩りができる

- 獲物の上でも行儀よく、いつでも扱いに困ることはない

このセクションでは、ポイント A からポイント B に到達するのに必要なことを解説します。

## 5.5 マニング（懐け）と基礎調教

幼い猛禽は、見慣れないものをじょじょに恐れるようになります。（4章10節参照）恐怖でいっぱいになった猛禽には、人間と人工物を受け入れるゆとりがありません。マニング（懐け）とは、猛禽を怖がらせることなく、ファルコナーが彼らの世界へそっと入っていくプロセスのことです。そうすることで、猛禽の世界に人間を少し持ち込むことができるでしょう。人を恐れないように育てられた猛禽なら（5章3節参照）、このような調教方法は必要ありません。タカ類は猛禽類の中で最も怖がりです。飼育下のストレスは糖尿病、アスペルギルス症およびその他の病気を引き起こします。ソーシャルインプリンティング<sup>1</sup>が最善でしょう。猛禽が人間を恐れていると、調教は進まないでしょう。

伝統的なマニングは馴化を利用して猛禽の恐怖を取り除くものでした。当初怖がっていた刺激を猛禽が気にしなくなるまで、何日も拳の上に据えました。多くのファルコナーは馴化と正の強化または食欲を組み合わせませんでした。結果として、この方法は猛禽を馴らすことはできたものの、とても手間がかかり、調教された猛禽の仕上がりも良くありませんでした。何より猛禽に不必要なストレスをかけるものでした。この方法で馴らされた猛禽は、獲物を追わせる前に一時間のマニングが必要だったり、狩場で見失うと、回収できるまで24時間以上かかりました。現代のマニングは、馴化よりファルコナーと餌の好ましい結びつきを作り、強化することをより重視しています。猛禽にその場を耐え忍ばせる馴化より、速くてポジティブな方法です。

※本原稿は翻訳作業中のもので、完成版とは異なる部分もございます。あらかじめご了承ください。

---

<sup>1</sup> 人間と猛禽の両方に接しながら育てること